

二代教会長 故野村穎璋美志道次秀貫歩大人一年祭 偲び草

おかげの中でのこと

金光教土佐高岡教会

ご挨拶

父がお国変えをさして頂き早一年。神様、皆様の御蔭で無事に過ごさせて頂き有り難い事です。

一年経ちましたものの、何かどこかに父が居るような感じが今だにいたします。

御霊様になつて、守つて下さっているからか、家族が亡くなるとそんなものなのか不思議な感じがいたします。

父の事を思い返しますと、私が子供の頃、喘息の発作を起こし、夜中に自転車で病院に連れて行つてもらつたことをよく思い出します。父の背中にもたれて自転車で乗っていたのが、晩年は父を車椅子に乗せて、病院に送り迎えするとは、子供の頃は考えもしませんでした。親子の関係つて基本はそんなものなのでしょう。父は晩年よく私が世話をすると、「ありがとう」とよく言つてくれました。

自分も、晩年になれば子供に世話になる事ばかりになると思いますが、父の様に子供にも素直にお礼が言えて感謝ができる様にならせて頂きたいものです。

(副教会長 長男 野村真二)



(▲平成23年1月15日最後の御本部初参拝にて家族写真)

「穎璋先生と結婚させて頂いての思い出」

昭和三十九年、須崎教会長、竹内鶴松先生より「今、金光教学院に弟子が入っているが、土佐高岡教会の登茂子先生にどうであろうか。」

とのお話が野村トヨ親先生にあつたとのことで、私に伝えて下さり、学院中なので御本部へ参拝させて頂きました時、真光園の旅館でお見合いをさせて頂きました。

話しをさせて頂きます中に「高岡の親先生なら親としてついていけそう。」と言うて下さったので、私はそれならということに思わせて頂きました。ある先生が「人間は結婚をして家庭を持ち、子育てをさせてもらい、教会に難儀な心で問題のおかげを頂きたいと御取次になられる信者さんのことが、真剣に神様にお願ひさせて頂くことが出来るのである。」と、教えて頂いていましたので、そういうことなのであろうかと思わせて頂き、学院卒業したらずぐ身一つで来て頂いたらいいからとのこと、卒業一週間で来て頂けるように話がまとまりました。

昭和三十九年四月二十六日に仲人として高知親教会、道願正信親先生、千文親奥様にお願ひし、道願政治郎親先生が御祭主をして

下さり、身内親族の人々の祝福を頂き、竹内鶴松先生にも御用頂き土佐高岡教会の御広前で結婚式をあげて頂きました。

穎璋さん二十三歳、私、登茂子は二十五歳の時でした。

結婚式の終わつたその晩のことです。

私は不思議な知らない人の夢を見せて頂きました。

その人はきちんと羽織、袴を身につけられ、私の前に手をついて頭を下げて下さり「穎璋のことよろしく頼みます。」と言うて下さいました。

夢の中で初めてお会いする人なので、ハッキリは分からないけど「穎璋のことをよろしく」と言うて下さると言うことは、中学一年生の時に亡くなられたと聞いていたが、そのお父様だろうかと思わせて頂きました時、夢から覚めました。

それから十日程して穎璋さんと二人で、東津野へ結婚させて頂きました御挨拶に行きました。

その時、額に入つておられた一人の男の方の写真が目にとまり、「このお人は」と穎璋さんに聞きますと、「それはお父さんよ」と言うて下さり、

それは先日、夢で見せて頂きましたお人と同じだと分かせて頂き、こんな私でもお父様が「潁璋さんのことをよろしく頼みます」と頭を下げて下さったのだなと勿体無く、親は子供のことが御霊様になられても、生きておられる親と同じに大切な可愛いものであり、幸せになつてくれと願つて下さつてあるのだなと有難く思わせて頂くのでございます。

親に心配をかけないように潁璋さんと夫婦として仲良く暮らさせて頂かねばならないと、心させて頂いたことでもございました。

生活させて頂きます中に、潁璋さんと私の性格、信心の頂き方、またトヨ親先生、母との生き方が何か違うように思え、いろいろと問題が家庭の中に起きてきました。

その内に私に子供ができ、またそのことについても、いろいろ行き違いがあり問題になり、親族会議を開いたり、私は本当にトヨ親先生、母に申し訳ないと思い、またトヨ親先生、母も私達夫婦が幸せになれるのだろうかと心配して下さり、高知親教会へ参拝させて頂きました。

潁璋さんは教会で帰るための荷物を作つていました。

私はトヨ親先生と参拝させて頂きました。

正信親先生は私共に御結界より御取次お話しをして下さいました。

いろいろお互いに生き方は違つても、その相手の生き方を認めて、良い生き方になるよう信心の稽古をさせて頂かねばならないと御教え下さいました。

トヨ親先生、母は「はい分かりました。稽古をさせて頂きます。よろしくお願いします。」と二人で教会に帰り、潁璋さんとも話しをし、良き家庭になるよう稽古をさせて頂きました。でも次々問題が起きてきましたが私は本当に結婚生活は難しいものだと思います。

私共夫婦には神様のおかげを頂き、私は三十九歳の時「今夜の命がない」との大病をしており、神様のおかげを頂き命を頂いて、医師より「結婚はしてもいいが子供は産んではいけない。子供ができて産む時は死ぬ時だ。」と言われていた私に四人もの子供のおかげを頂き、長男長女は親の御無礼で産まれて間もなく亡くなり、二男三男はおかげを頂き成人させて頂くことになりました。

トヨ親先生、母も昭和四十七年亡くなり、私共夫婦と二人の子供と四人で暮らさせて頂くことになり、潁璋さんも教会長にならせて

頂き、私はその御用の蔭の御用をさせて頂くことになりました。

その内に平成五年に教会長である顥璋先生が病気になる、人工透析を土佐市民病院で受けられることになり、その前には胃ガンの手術をされたり、いろいろ入退院を繰り返されることになりました。

その時は子供達も成人させて頂き、金光教学院にも行き金光教教師にお取り立てを頂いていましたので、父親の病気の看護の手助けもして頂けることになり、御用の方も教会長ができられない所は、他の一同の者で御用させて頂き、十六年人工透析を受けられ、平成二十三年四月五日、神様のおかげを頂かれ、二代教会長野村顥璋先生は神様の御元に御帰幽になりました。

私は四十七年間の結婚生活をさせて頂きました、本当は最後まで神様のおかげを頂かれての御国替えであつたなど最後のお別れを私は一人病院で一晩付き添わせて頂き、静かに神様の御元に旅立ちをされるのを見取らせて頂きました、神様にも命のある限り生かせて頂いて有難いことと御礼より他になく、良い妻ではなかったかも知れないけど、今日までの御礼を

申し上げさせて頂いたことでした。

振り返り、始めの内は問題がいろいろありましたが、病気をされ亡くなる二年程前からは、体もあまり自由に動かれることができられなくなり、それから、私を始め、周りの人に何か用足しをして頂かれると「有難う、有難う。」と御礼を言つて下さつていました。



(▲なごみ館にて)

また一週間の内、月水金は人工透析に通われ、火木はデイケアの所(デイサービスなごみ館)へ行かれ、お風呂に入れて頂いたり、週二日は朝九時頃から夕方四時頃まで行つて下さり、それも私のために世話を少しでもかけないように行つて下さつてあるとのこと、私にも感謝とか御礼とか思いやりを持つて下さることに

なり、私も顓瑋先生は長年、教会長でもあり、金光教の信心をさせて頂かれるということは、本当に有難いことだと思わせて頂きました。

亡くなる少し前に病院へ私が行かせて頂きましたと、思いがけなく私がビックリさせて頂く程の泣かれ方で泣かれるので、私がその日はよう聞かなかったのですが、明くる日に病院へ行かせて頂きました時「昨日は何故あんなに泣かれたの？」と聞きますと、顓瑋先生は「あんなことは始めから信頼はしていたが、今日まで偉そうなことばかり言うて済まなかった。」と断りをして下さり、今日まで心につかえておられたか謝つて下さり、私は「これでこの世のお別れなのかな」と思わせて頂きました。

結婚して四十七年の記念日の時「今年は四十七年目だね」と言いますと、ぽつんと「あと三年か」と言われましたが、今考えてみて結婚五十年のことを思い言われた「あと三年か」ではなかったかと思わせて頂き、始めはどうなることであらうかと思わせて頂いたが、神様、金光様、親先生、多くの人々のお世話になつて、ようここまでおかげを頂いて続けさせて頂いたことであつたと、有難く思わせて頂いております。

顓瑋先生と、趣味で同じところが一つだけ

ありました。

それは音楽、歌でした。

その時はテレビを見ながら話しをさせて頂いたことが思い出されます。

私は信心とは有難いものである、まして金光教の信心で私共夫婦は助けて頂きました。今は御霊の神様で教会のこと、私共一同のこと、私のこと、お守り下さつてあることでしよう。顓瑋先生いろいろ有難うございました。

(在籍教師 妻 野村登茂子)



(▲御本部参拝にて)

「おかげの中でのこと」故野村穎璋大人（遺稿より）

【平成十五年（二〇〇三年四月二十日）高知上町教会天地金乃神大祭『最後の大祭教話』】

教祖の神の御教え、

『お天道様のお照らしなさるのもおかげ、雨の降られるのもおかげである。』

人間はみな、おかげの中に生かされて生きている。人間は、おかげの中に生まれ、おかげの中で生活をし、おかげの中に死んでいくのである。『神は、体の毒を日に日に大便小便で取つてくださる。』

『自分の信心が足りないためにおかげを受けられないのを、神のおかげがないように思っている。神はこれが情けなくてならない。』

『わが身はわが自由にならないものである。』『神のおかげで生まれてきた人間であるから、死ぬのも神のおかげでなくて死ぬるものか。』

そうであるから、生まれたのがめでたいなら、死んで神になるのは、なおのことめでたいではないか。死ぬのがつらいと言うのは、まだ、死ぬのをいと

わないだけの安心ができていないからである。

信心して、早く安心のおかげを受けておかなければならない。

神のお計らいでは、いついっくかも知れないのに、その際のうろたえ信心では間に合わない。

平生から、まさかの折にうろたえないだけの信心をしておかなければならない。『

信心する者が、喜ばない、つらい顔をして日を過ごしてはならない。』

天地の親神を信心するのであるから、天地のような広い心にならなければならない。『

神を使つて、神に使われることを知らない。』『悪心を持つ者は必ず、末にその報いが来る。』 - 6 -

すなわち、天理（天地の道理）のおさえを受ける。それは、今の裁判所の法律のごとくである。』

『教祖は、ある時のご裁伝に、神の上に天理（天地の道理）を教えられたり。』

『神は親子であるから氏子のごことは許してやるが、天理（天地の道理）が許さぬ時は、どうする』

と教えらる。

また、ある時は、

『天理が許さぬ時は、神もしかたがないぞ』と教えたまいしあり。』



(▲高知上町教会天地金乃神大祭にて)

ただ今は教会長先生のご祭主のもとに、
天地金乃神大祭を美しくお仕えになり誠に
有り難いことであります。

私もおかげを受けまして、二十歳の時に死ぬ
処を、金光教に御縁を蒙り医師から三か月か
半年の命しか持つまいと宣告の中に須崎教会の
先代親先生のお取次ぎご祈念を賜り、おかげを
受けて腎臓病のおかげを頂いたのであります。

その上にこうして、お道のご用にもお取り立て
下さり、おかげを頂いて、六十二歳の今日まで
こうして生かされておりますことは、誠に勿体
ないことだと最近しみじみと思うのであります。

前の教主金光様が、「何事もおかげの中での7
事でありますから、おかげにならぬことはあり
ません」と言うようなお言葉がございますが、
つくづくそうだなあと思います、教祖様は「お照らし
なさるのもおかげ、雨が降るのもおかげ、おかげの
中に生かされている。人間は、おかげの中に生まれ、
おかげの中で生活をし、おかげの中に死んで
いくのである」とみ教え下されてありますように、
本当に考えてみればその通りであります。

しかし私どもはおかげを蒙るとは、病気が全快
するとか、貧乏が金持ちになるとか、人間関係なら
相手が自分に合わせてくれるとか、と言うように、

何でも自分の思い通りになることをおかげを頂いたと申すところがございます。

しかし、それでは病気が治らなければおかげではないと言ふことになりますね。

また貧乏も金持ちにならねばおかげでないことになります。

おかげとは、そんなに狭いものでしょうか。

金光教に関してはどうも違うように感じられます。

教祖様は、七墓築かされるようなことになつても、我々凡人のように、神様をお恨みにはならなかつた、神様のからにもなさらなかつた、只一筋に自分の至らなさを詫び、人間の尽くせる限界まで実意をこめられても、これですんだとは思いませんと、どまでも人間の不行届きをお詫びなされました。その行き届いた心を天地金乃神様が、お喜びになられ、「戌の年は、神の言うとおりにしてくれ、そのうえに神と用いてくれ、神も喜び。」と教祖様をお称えに成されたのであります。

そこで思いますのは、私どもはどうでありましょうか。

人頼みの信心でもこれ程信心しているのにと、まるで神様のためにでも信心してあげているかのように申して、おかげが無いと愚痴を申します、

自分中心の考え方や生き方をなさる方は、おかげを蒙りましても、おかげとよう受けられない方がございます。

こんな方を神様が御覧になつて難儀な氏子と申されるのだと思ひますね、口を開けば愚痴ばかりなんですが、お礼を申さねばなりませんと申しますと、大抵お礼を申しているのにこれ以上何をどんなにお礼を言うのですかと言われたり致しますね、先程申しましたように、教祖様は、どこまでも「これで済んだとは思ひません。」と言ふ心です、私どもに求められるものはこの心これで済んだとは思ひませんというひたむきな謙虚な心であると思ひます。

私のことを少し話させて頂きます。

四代金光様は「何事もおかげの中でのことでありますから、おかげはうけられます」というようなお言葉がございしますが、私は二十歳の時に腎臓病で死ぬるところを、お道に御縁を頂いて親先生の厚き御取次御祈念を頂いて助けられて、六十二歳の今日までこうして生かされて生きておりますことは、有り難く勿体ないことだと思ひます。

その上にお役に立つような御用も出来ておりませぬのに、道の御用にもお使い頂いておりますことは、本当に勿体ない限りでございます。

もし二十歳の時に今のようにな腎不全でありましたら、またその当時には今のようにな人工透析という治療がございせんから、死ぬところを一步手前でおかけを蒙らせて頂いて、止めていて下さつたのではないかと思うのですね、その間には献血も三十回と言ふ表彰を頂く程でございました。そして平成五年頃に急に体が痩せてくるし、なんともしんどくて大祭時に装束のカバンを下げて各教会に行かせてもらうのに、途中で少なくても一、二回はカバンを置いて休まなくては、一氣に歩くことができなくなり、ある時ご信者の方が私に、

「先生、の頃大変お痩せになられたように見受けられますが、病院に行つて診てもらつてますか。」と言ふので、

「診てはもらつてないけれども、行てもどうといふことはありませんまい。」

と言つていたので、その方が、

「どうぞ私たちのために一度病院に行つて診察を受けて下さい。」

と言われ、そうだあまりご信者さんにまでご心配をかけたのでは申し訳がないと思ひ、病院に行き診察を受けましたところ、医師より、「こんな血圧は診たことがない、最高血圧は血圧計であまりにも高すぎて計れない、最低血圧が普通の血圧の上より高い。」と言われ、その上に、

「腎臓が腎不全を起している、即入院して下さい。」と言われ、入院する積りで来てないので、

「一度帰つてから。」

と申しますと、医師より、

「返すわけにはゆきません。途中で倒れでもしたら私の責任になりますから。」と強く言われたのであります、

「どうしても一度帰つてから出直します。」

と申して帰らせて頂き支度をして入院させて頂いたのですが、それから度々入院退院を繰り返している内に、

「退院前に胃の検査をしてから帰つては。」

との院長先生の薦めもあり、胃カメラを入れての検査で医師より、

「検査の結果、胃上部に異質細胞が見つかったので、出来れば早く手術をして除けた方がよい。」とのことで退院どころではなく胃の手術ということになりました。

手術をして下さる主治医の先生は徳島県から来られていた外科の先生で、私が金光教の教会人であることが分かると、先生は、

「僕のところも金光教です。」

とおつしやり親しくまたいろいろと丁寧に手術の段取りなども教えてくださり、内科の先生は、

「人工透析はまだ早い。」

と言つていたのですが、外科の主治医の先生が、「手術の前に透析を初めてもらつて血液を

きれいにしなければ、術後の傷が直りにくいので透析を始めますから。」

と申して透析をするためのシャントという血管の手術を先にして、透析を始めて十日ぐらいしてから胃の手術となつたのでございます。手術で取り除けた異質細胞はガンの初期で、「すべて取り除けることができたので安心して下さい。」

といわれましたが手術後にブドウ球菌が入り、特別隔離室に入れられ一か月くらい隔離されたのでございますが、やつと菌も無くなり普通病棟に移り、「次に大腸の検査もしておきましょう。」

と言う事になり大腸の透視の検査を先ず受けましたところ、

「大腸にポリープが見付かったので、大腸の内視鏡で手術をして取り除けましょう。」

ということになりましたが、私の腸は直腸より奥が人より長くその上に縫れたようになっていて「そこまで入らない。」

と言われ取らずに退院となり、

「近森病院に、高岡出身で腕の立つ内科の先生がおられるから、紹介するので行きなさい。」

ということになり近森病院に行き大腸カメラを入れ先生が、

「こんな難しいややこしい腸は始めてだった。」
といわれ二つのポリープを取り除けるのに、なんと四時間近くもかかりやつと終わったので

あります。

大腸のポリープは悪性ではないから安心して下さいとのことでおかげを蒙つたのでございます。

それから毎年一度は検査を受けておりますけれどもおかげ様でガンの再発もなくおかげを頂いております。

そして今は週に三回月水金と透析を受けておりますが、おかげでこうして元気に普段はおらせて頂いております。

透析という治療もこれを全額自己負担ということでありましたら、腎不全患者の九割りの人は死んでいるのではないでしょうか。

億単位のお金があつても何年も持ちませんからね、今はおかげさまでこうして何のお役にも立たないような私でも、こうして透析を受けさせて頂いて生かしてもらつております。

勿体ないことでございます。

皆様は天地のお恵みを頂いて生かされて生きておりますが、私は天地のお恵みの他に人工透析という高度な医療器と、透析室の工学医療技師、看護師などさまざまなスタッフの方々に支えられつつ生かされているのであります。

こうして透析を受けなければ生きられない私どもは、一週間もそのままにすれば、いやでも死に至るのでございます。

透析を受けながらも、一つ食べ方が悪かつたり飲み物を一つ欲を出しますと、場合によつては

心臓が停止したり呼吸困難に陥ったりするのです。一つ間違えば死ということになるのです。

その中でこうして元氣におらせてもらっているという事はおかげなのであります。

前教主金光様は「世話になるすべてに礼をいふころ」とみ教えになつておりますが、考えてみますと本当に人間はあらゆる物に人に、世話にならずに生きられるということは一つもないのであります。人間同志でございまして私どもは「あの人は好きこの人は嫌い」と言う事をよく言いますが、好きな人嫌いな人がいて人間は成長するのですね。好きな人ばかりでしたら努力もいりませんから成長するということはありませんのです。

嫌いな人がいるから、この人どうやって付き合つて行けば、楽しく生きて生けるのだろうかとか考え努力して良い生き方が生まれてくるのです。ここに、信心の世界が生まれてくるのです。

人間の考えではどんなに優れた哲学者も倫理学者も、行き詰まるこれ以上人間としてどうしようもないという行き詰まりが生まれてくるのです。しかし信心の世界にはどんなになつても行き詰まりということはないのです。

どんなになつてもあきらめたり悲観したりすることなく信心生活を求めていけば、先に申しましたように「おかげの中でのことでありますから、おかげになります。」といわれたように、信心辛抱して取り組みれば開かれて参ります。

これが信心の世界なのであります。

この道ではどんな難儀なことでも逃げたり諦めたりすることなく、ひたすらに信心辛抱させてもらう事により、どんな困難なところにもかならず道は開かれてくるのです。

私は皆さんご承知の通り週三回の透析を受けておりますが、こうして間の日は腎不全の体と言う事を忘れるほど元氣でおらせて貰つております。そして透析を受けるのには水分を制限されるのですが、私はおかげさまで胃の手術をしているところから、どんな御馳走でも人並みには頂け無いくことがおかげなのであります。

食べ過ぎ飲み過ぎがあまりありませんからね透析が楽なのです。

私の両隣のベッドの方は食べ過ぎ飲み過ぎをされて大変透析中に難儀をなされておられます。そうしてみると私の場合は人並みに頂けないのがおかげということになるのですね。

ここで大切なことは、今の自分のそのままの姿をお礼を申し、今の姿がすでにおかげを受けているという事であります。

天地の中のあらゆるものにお世話になつて生かされて生きております。

人間関係でも好き嫌いがございますけれども、嫌いだから付き合わないとか、好きだから付き

合うと言うのでしたら、それは違うと言うことに最近ようやく気が付かされております。

この道の信心はどこまで神の氏子として、嫌いな人や性格の合わない人を好きになり合わせて行くか、そこに信心の価値が現されて来るのだと思います。

あの人は好き、この人は嫌いと言うのであれば、なにも信心することはいらぬのです。

私は今日まで随分人の好き嫌いをして参りました、その心が邪魔をして少しも修行ができませんでした、ということに気が付かせられております。

自分の意に沿わないと腹を立てると言う生き方をしていたのです。

信心して道を立てるとか、親を頂くということは、自分が出るうちは、本当に道も立たず、親も頂けないのです。

問題が起こるのは、自分が自分を分かつてないからであるということに気が付かなければ信心にはならないのです。

自分の何に気が付かねばならないかと申しますと、何にもできない、何にも力のない、何にも分かつてない、自分であるということに気が付かせてもらうという事であります。

ここにどうとん気が付くと素直になれるのですね、

分らないのですから人に聞かねばなりません。力がないのですか人に力を借らねばなりません。

親の言う事が聞けないということとは、自分に分かつておる知つておると思うから聞けないのですね、今は親よりは、どうしても、学問てきには、親よりも理屈では優れております。

しかし生きると言う事は、理屈ではないのですね、例えば、女の人が子育てをするのに、大学を卒業しているから、立派に育てられるというものではない、小児科の先生よりも、時には無学でも実際の体験を通して培われた母親の意見が正しい時の方が多いのです。

そのように人生は、数学や科学とは違い理屈通りにはいかないのが人生ですね、信心もこれと同じ様に理屈では分からないところがあるのです。実際に生活の中で実践してみても始めて分かるものなのです。

信心の難しいところは何かと申しますと、本を読んだり話を聞いたり致しますと、頭ではある程度信心の理屈が分かります。

しかし頭で分かつたから信心も分かつたかという、そうとはいかないのが信心なのです、信心が本当に分かつたと言ふ事は、信心の生き方が身に付いているということではなれないのです。

例えば、冗談一つ言っても人の心に傷つく言い方となごます言い方とあると思うのです。

信心させてもらうものは、なごます言い方ではないかもしれませんね、これが身に付くという事が信心なのであります。

私はよく夫婦のなかで、家内が嫌な思いをするような言い方をする事がしばしばあります、これは信心でないのです。

こういう言い方を致しますと直ぐに分かるのですね、自分の心が何となく嫌な感じが出てきますから、これがおかげの中でありますから、和賀心の神様が気付かして下されているのであります。

これを改めて行くのが信心の稽古なのであります。四代金光様がある時、参拝された方がお詫びを申されたところ、金光様が「言葉でお詫びをされずとも、心から改まられたらそれで結構であります」と言われたと聞いたことがございます。

神様から気付かされますと、その時には御免と言つて誤つたり致しますが、本当に誤っておりませんので、改まるという事ができておりませんから、また、同じ事を繰り返しますのであります。

これでは何十年信心いたしましても同じことだということになります。

いや何十年も神様は拝みましたが、信心はしなかつたということになるのです。

これでも神様はおかけを下されております。勿体ない事であります。

共々に信心をさせて頂いて、おかげを蒙らせて頂きましょう。



(▲御本部大祭へ須崎教会と合同参拝の時にて)



(▲土佐高岡教会大祭後挨拶にて)



(▲土佐高岡教会の元日祭教話)

平成十八年頃、教会長として御用下されていた頃の写真。

父、野村穎璋親先生もフィルムカメラや、ビデオカメラなど、機械物は好きで、いろいろと写真などもあるのですが、私と同じ、撮影者としてカメラに撮られることや、記録に残ることも少なく、晩年は私が撮影するようにになりましたので、いくらか写真に納めることが出来ました。しかし以前のカメラは画質が悪く、申し訳ありませんが、雰囲気だけでも感じて下さい。

(撮影 野村清治)



(▲土佐高岡教会の元日祭後にて)

故野村穎璋美志道次秀貫歩大人之靈神一年祭祭詞

平成二十四年四月十五日

あはれ是の教会の御霊舎に、斎き奉り鎮め奉る、言はまくも尊き、故野村穎璋美志道次秀貫歩大人之靈神の御前に、金光教土佐高岡教会長野村清治、謹みて告り白さく。

あはれ、人の生き死には天地の道理に定まれし事にて、誰しも避けては通れぬ事なれば、いたずらに心惑わす事は親神の御心にも適わぬ事なれど、不肖己の不徳なる事をお詫び申して暫しのお許しを願ひ奉らん。

汝大人を偲ぶるに、来るとし言へば、御空に浮く雲の影もいと懐しく、行くとし言へば、川を流るる水さへいと惜しまるるは、空蟬の人の心の常なるを、長き年頃深く厚く頼み奉り、親しみ奉り来たりし汝大人の、逝きて帰らぬ八十の隈路に出でたちましぬと聞きては、誰しの人か惜しみ奉り悲しみ奉らざらむ。

然かはあれど、玉の緒の御命の限り神の氏子とある人のまことを現し給ひ、身を尽くし給ひて、御心静かにも安らに、我が親神の御許に帰り給ひし、雄々しくとも健気なる御一世を仰ぎ奉り偲び奉らば、なかなか尊しとも床しくとも香具和しく、いたずらに悲み奉ることにはならざらむ。汝大人は、昭和十五年十一月十六日に高知県東津野村宮谷にて、御父川田玉義ゐ、御母吉恵ゐの二男五女の末の子に生れ出で、垂乳根の親の慈しみのまにまに、最健やかに生ひ立ち、昭和三十一年三月に高知県東津野中学校を卒業すると、大阪の阿倍野に働きに出るも、地元へ帰り、理容の見習い、あるは洋服店で働くなどする中に、二十歳の時に重き腎臓病に罹り、姉である松阪歌子ゐの導きにより、この御道に御神縁を蒙り、故須崎教会長竹内鶴松大人の御取次のまにまに、病氣全快の神みかげを蒙り亡き命を継いで頂き、さらに御礼の参拝をされる教会長を通じ、三代金光様の御取次を賜る中に、お道の御用をさせて頂くようにとの御言葉に、心が揺れ動き、悩みながらも心を固め、強い決意もて、須崎教会、川上教会にて修行の後、金光教学院に入学、その間に見合いの話を受け、これの教会の初代教会長野村トヨゐにならついてゆけると、金光教学院を卒業するとすぐの昭和三十九年四月二十六日に、これの教会の教師である野村登茂子ゐと妹背の契りを結び、御神縁の

ましまし、この初代教会長野村トヨゐの養子となりて、副教会長として信心の稽古に励みてある中に昭和四十年二月二十八日には愛子である長女真子ゐを授かりしも三月三十日に発育不全で身退り、さらに長男真一ゐも八月二十五日に流産で身退るなど、親としての苦難に出合い、昭和四十一年八月六日に二男真二ゐが生まれし喜びはいかばかりか、また昭和四十六年八月十七日の三男清治の誕生は喜びであらうか。

さらに昭和四十七年三月五日には、この教会も御造営のおかげを蒙り、道の礎が開かれしは初代教会長の御徳なれど、その基を築きし初代教会長が思いがけぬ心筋梗塞にて昭和四十七年十月六日に亡くなるも、汝大人は御跡を受けて、土佐高岡教会二代教会長として御用に励み、教内においても四国教区教区委員、高知県東部教会連合会会長など務められ、教会においても参来る氏子に天地の道理を諭し給ひ、救い助け給ひてあるは、尊しとも尊し。

しかるに教会長として三十六年を迎える中には、御子達も金光教教師にお育てを蒙り、真二ゐには嫁を迎え、孫子もでき、教会布教五十年を目前に控え、これからどの思いの中にも、高血圧から腎臓を悪くし始め入院、その間に胃ガンが見つかり手術を受けるなど、その後、腎不全となり、人工透析の治療も受けるようになり、その治療は十六年もの長き治療となりぬ。

さらに眼底出血、脳梗塞など読み書きが不自由になるなど、御用の上にも難きことども起こりしは、心情的かばかりか。

ついには肺炎にて入院をきつかけに教会長を不肖己に譲られしも、教え導き下されしは畏しとも畏し。

しかるに平成二十三年二月十一日の透析治療にいつもの通り向かいしも、熱を出し、医師の見立ては敗血症とのことにて、胃腸、胆嚢など炎症が起る中、二十四時間点滴にて絶飲食となり、さらに大腸の血管の瘤にて透析治療のたびに激しき痛みに耐えながらも、五十三日間の入院治療にて、桜の花も咲きて散りゆく四月五日の朝まだき、苦しき息も午前三時五十分を過ぎた頃、教主金光様のお出まし御祈念に合わせるかの如く呼吸を静かにし家族達の見守る中、午前五時三分に、齢満七十歳四ヶ月二十日というをもちて是の世を身退りぬ。

汝大人の一生のこと思い返すは、悲しきことなれど天地の親神の神慮の中におかげを受けて、朝霧の八重たちこむる幽けき境に立ち入りましては、言はむ術、詮術なく、由々しきことの極みなれど、明くる四月六日、七日にしも、高知教会長道願正美親先生の仕え奉る式のまにまに永遠の別れの葬儀、しめやかに厳かに仕へ奉りて、あはれ、花ならば散りゆくとも又も咲きなむ、月ならば隠れ

去ぬるも又出でなむに、逝く水のゆきて帰らぬ汝大人を、火葬場に送り立たせしは、昨日のこととも思ほゆれど、後に残されし者らは、ほとほと戸を鳴らす風の音にも、大人が声かとも耳そば立て、夜毎に清らけく高照る月かげにも、懐かしき汝が面輪を描き恋しみ奉りつつ、十日祭に、あるは旬日祭にと真心を尽くして仕へ奉り来て、五月二十五日にしも須崎教会長竹内一典師の仕え奉る式のまにまに五十日祭並びに世代の御祖の霊神等と合はせ鎮め奉りて、合祀祭仕へ奉り、不肖己御遺骨は教会奥城に納め奉り、墓前祭も仕え奉り、夏も盛りの七月十四日には、汝大人を偲びつつ、百日祭を仕え奉り、秋を迎えれば、秋季霊祭には夢うつつと共に御用を仕える様を目にしつつ、十二月十一日には、御本部の布教功労者報徳祭に参らば、教主金光様のご祭王の元に汝大人の奉られる御姿を御側で拝し奉らん。

いつしか時は流れ、御霊の祭りを仕え奉る度に、汝大人の事を偲び奉り、四月五日には早くも一年のご命日を迎え奉れば、先達て教会奥城にて一年墓前祭仕え奉り、御前を鎮め奉り治め奉りて、これの四月十五日は教会の天地金乃神大祭なれば、今日を佳き日と汝大人の、或は一生の御功績を称へ、或は深き御慈みを偲び奉りて在りし昔を恋しみ奉り慕ひ奉りつつ、拝み奉りて御前に御饌御酒種種々の味物を供へ奉りて、治め奉り式のまにまに玉串捧げ奉り、一年祭仕へ奉る事の由を、17霊ながらにあな嬉し樂しと聞きしめし受け諾ひ給ひて、今も往先なおも穩ひに安らけく神府に鎮まりまして、17尽き甘ぬ幽界の冥福を蒙り、立ち栄ゆべく御心も甘らに、安らに受け諾ひ給へと白す。

かく仕へ奉りて白し上げ奉らくは、汝大人はし、この道のおかげの中に身退りしことども、我が親神に、真明かに見覧はし給ひ、御親を始め愛子諸々の霊神たちも、愛で給ひ褒め給ひて、相共に家の鎮め、子孫の守りと、安く穩ひに鎮まりまして、限りなき神幸蒙り給ひ、真の霊の樂しびをも受け給ひて、子孫等も、汝大人が、尊くも床しき一世の生きられ方と、御思ひを露おろそかにすることなく、弥確に我が身、我が命に受け頂き奉りて、その御祈りを、各自各自の日々の生活の上にも現し奉ることを得さしめ給ひ、睦び和らぎ給ひて、末々かけて助かり立ち行かしめ給ふべく、汝大人はや、野村の家の氏神と神立ち給ひて、わが生神金光大神御取次の道の中に取次ぎ助けられ給ひ、家族親族をはじめ、教会に参来る氏子等の上にも、縁ある子孫の弥遠永の守りの神と鎮まりまして、後に残りし者らの上に霊の光を弥輝かし給ひ、守り導き幸へ給へと弥遠に弥広に、靈幸はひ給へと、謹み敬ひも白す。

平成二十四年四月十五日

編纂後記

一年とは早いもので、私は父より教会長の後を託されましたが、覚悟を決めたのは、父が胃ガンの手術をした後でしようか、父本人は熱でうかうかと記憶が曖昧の状態で、後でその時の事を聞くと、「そんなことを言ったか。一ヶ月はあ覚えてないき。」と元気になつてからは笑つて記憶が無いとも申しておりましたが、その時のこと、私が様子を見到病室に入ると、

「よう来てくれた。」

と感極まられたような様子にも見えましたが、話しをして、さあ帰ろうとして、手を握つてあげた時に、何思わず力強く握り替へてきたのです。

そして涙を目ににじますような思い詰めた表情で私の目をしつかりと見据えるように、

「後のこと、教会の事を頼む。」と言われたのでした。

私はガンということもありましたし、まだ学院を卒業してきて二、三年のことでしたので、何の覚悟も出来てはいませんでした。父の真剣な表情と力強い手の感触は忘れられず、自分の中では、教会の後を御用させて頂くのかなど、心に決めた時でもありません。

父が入退院を繰り返す時には、私は教会の事、教区や連合会にも代務として出席させて頂くことも多くなり、父が眼底出血や脳梗塞で、

読み書きが不自由になつたことから、毎日の御祈念時間や御取次の御用にも、内殿の御用と御結界の御用をするようにと申されて、一つひとつ御用を覚えさせて頂くことになりました。また、透析治療が始まるようになると、週に三回のため、教会の祭典日とも重なることが多くなり始め、祭典準備や祭主の御用までさせて頂くことになりました。

大祭の準備の時など、四手を裁つたり、御饌袋を作られたり、手先も不自由にはなりましたが、私がお供え物をさせて頂いている時に、共に徹夜しながらも、できられる御用を一つでもと取り組んで下されました。

夜半過ぎ眠気が襲つてくることもありましたが、何気に台所に行かれて、コーヒーなど作つて下されたり、心配りを下されたことなど忘れることができぬ思い出となりました。

亡くなられて私は教会長として、家人でありながらも葬儀一切の御用にお使い頂いて参り、また、秋季霊祭の前に、夢に現われ祭詞のことなど教えて下されてあつたことに、親の思いとは有難いものであると、しみじみと感ずるものがあります。

御霊の助かりと立ち行きをお祈り申し上げます。

(教会長 二男 野村清治)



(▲平成15年11月23日須崎教会教祖120年生神金光大神大祭にて)